

「世界はつながる」 (臼井静子)

[おすすめしたい本：ヤコブ・フォッセスタイン 谷下雅義・編訳
『オランダ 水に囲まれた暮らし』]

水の中に延びる滑走路。これが表紙を見たときの第1印象です。しかし、この滑走路は向こうの端まで続いています。「終わりのない滑走路」というのも不思議です。『オランダ 水に囲まれた暮らし』という本でした。

オランダは風車の国。チューリップの国。そして海面より低い国。これぐらいの知識しか私は持っていませんでした。海面より低い土地と言えば海津町です。海津町や、大垣でも土地の低かった浅草などには、かつては堀田がありました。堀つぶれと田とがパッチワーク模様のようになっていました。これと同じ模様がオランダにもあることを知りました。でもそれは堀つぶれではなく、排水溝でした。排水溝にたまった水をより高い所にある水路に汲み上げる装置、それが風車なのでした。

泥炭を掘り、風車で排水することで土地から水分が排除され地盤が沈下します。その繰り返しでオランダの土地は海面よりも低くなっていったのでした。また、オランダの国土の約半分は海岸堤防が無いと浸水する区域だという事も知りました。私の住む輪中も、堤防によって洪水から守られています。海水や水から自分たちの土地を守る為に堤防を築いた人々が、オランダにも日本にもいたのです。

牧草しか生えない土地で乳牛が飼われ、牛乳やチーズ生産されている事。洪水時に浸水するように第2河川堤防が築かれている事。電動ポンプ基地、河川フェリー、堤防強化工事、運河沿いの住宅とハウスボート、氾濫原、新年の初泳ぎ、干潟ハイキングなどが、豊富な写真で紹介されています。

明治時代の後半、オランダからヨハネス・デ・レーケがやってきました。彼は、木曾三川の改修工事を行いました。私の住む村は、その時移転を余儀なくされました。当時の屋敷は今の揖斐川の真ん中あたりにあったのだそうです。日本とオランダだけでなく、私とオランダがつながっていたのです。一冊の本が、私と世界が繋がっていることを教えてくれたのでした。